

総合科学部創立二十周年記念事業

総合科学部評議員 ◆ 金田 晋

今年六月七日、わが総合科学部は二十周年を迎えた。これにちなんで、六月から七月初旬にかけて記念企画や行事が相次いだ。これらは三つのテーマをもっていった。

一、総合科学部の理念の再認識と二十年の足跡を点検すること。
二、総合科学部が社会にどのような期待され、どのように評価されているかを知ること。
三、近年全国の大学で創設されている、同じ精神の新構想学部と連携して、将来の学問・大学の建築に大きなうねりを作り出すこと。

創設以後の委曲を尽くした学部年譜、総合科学部に在籍した者の名簿が掲載され、また創設以後の学部の歴史が詳説されている。

「資料篇」は、学部構想の芽生えから大学院総合研究科としての地域研究研究科・環境科学研究科の創設に至る約十年間をカヴァーしている。

六月十一日(出)午前十時から、総合科学部南講義棟大講義室で記念式典がおこなわれた。原田康夫広島大学長、渡部三雄総合科学部長の挨拶、讃岐照男東広島市長の祝辞があり、総合科学部の現・元教職員、市教育・文化関係者、総合科学部卒業生および現学生、民間諸団体の出席をえて、盛大におこなわれた。

式典のあと、広島商工会議所副会頭、

理念としての人間性、創造性、総合性という三本の柱はたんなる美辞麗句でな



く、それぞれが旧来の学問への反省をこめた激しい内実をもっていた。

その歴史をもう一度私たち二十年後の世代の共有財産としたい、それが「二十年史」と「資料篇」の刊行にこめた思いであった。前者は六月七日に発行され、後者は秋に刊行される。

「二十年史」には学部創設の経緯、創設以後の委曲を尽くした学部年譜、総合科学部に在籍した者の名簿が掲載され、また創設以後の学部の歴史が詳説されている。

「資料篇」は、学部構想の芽生えから大学院総合研究科としての地域研究研究科・環境科学研究科の創設に至る約十年間をカヴァーしている。

六月十一日(出)午前十時から、総合科学部南講義棟大講義室で記念式典がおこなわれた。原田康夫広島大学長、渡部三雄総合科学部長の挨拶、讃岐照男東広島市長の祝辞があり、総合科学部の現・元教職員、市教育・文化関係者、総合科学部卒業生および現学生、民間諸団体の出席をえて、盛大におこなわれた。

式典のあと、広島商工会議所副会頭、



▲記念式典で挨拶する渡部学部長



▲記念シンポジウム
21世紀へのパラダイムシフト
―転換期の大学と学問―



▲左から「20年史」、シンポジウムのパンフレット、記念式典・祝賀会のプログラム

広島経済同友会特別幹事松井五郎氏（昭和十六年広島高等学校卒）による「世界が変る 日本も変る 大学は何処へ」と題する記念講演があった。オイル危機以後の産業界の省エネルギーへの転換がどれほど切実であったか、ノイズ、ランダム、揺らぎ、私秘性が本質的因子として登場する現代において、あらたな独創、創造を目指して、産業界は学際研究教育にどれほど期待しているかを、磁気テープ素材の世界シェア九十パーセント以上を占め、地元戸田工業を一躍国際的企業に発展させた実績を踏まえながら話され、大学よ志をもて、の微でもつてしめくられた。

○シンポジウム「二十一世紀へのパラダイムシフト—転換期の大学と学問—」

七月一日(金)、二日(土)の両日、標記シンポジウムが総合科学部東講義棟K211号室で、「学問論 学問にとつて総合性とは何か」、「大学論 新構想学部の理念・現実・課題」の二部構成でおこなわれた。前者では木下富雄氏（摂南大学教授、京都大学初代総合人間学部長）が同名の基調講演をおこない、個別学との緊張における総合の必然性、総合のさまざまなタイプ、総合へ向かう自由な精神、カリキュラム編成に反映させる総合の工夫と、研究と教育への全面的報告をされた。そのあとで野家啓一東北大学教授、村上陽一郎東京大学教授、米沢富美子慶応義塾大学教授をパネラーに加えてディスカッションをおこなった。精神の夢をかきかいた内容は、報告書にゆずるしかない（司会は筆者）。

後者では、蓮實重彦東京大学教養学

部長が「知の終焉？」という、只今ベストセラーの東大の教科書「知の技法」を彷彿させる、きわめて挑発的な演題で基調報告をされ、大学改革を理念に縛られるのでなく機能を高めるために、義務としてでなく権利を行使するために、喜ばしき意志たちの連帯意識による開かれた濃密さの空間の創造のめざす方向に説かれた。それに続いて、児嶋眞平京都大学総合人間学部長、丸山幸彦徳島大学総合科学部長、村上陽一郎東京大学教授、渡部三雄広島大学総合科学部長（司会を兼ねる）からそれぞれの学部の工夫、課題などが報告され、意見交換がおこなわれた。またフロアからは、田中雅男神戸大学国際文化学部長の報告もあった。教養部を母体に設立された新構想学部の、右記以外の学部長も多数全国から集まっていた。新構想学部同士の連絡会議を今後恒常的に開催し、相互の発展に役立てることが合意された。

○補足的報告

シンポジウムはNHK広島放送局が撮影録画し、さる七月十六日(土)夜九時四十五分から六十分番組に編集して広島地区に放映された。ご覧になりたい方は、ビデオ録画テープを用意しているので、総合科学部に申し出て下さい。また、このシンポジウムの報告書は、記念式典後におこなわれた松井五郎氏の記念講演も加えて秋に刊行する予定である。

記念行事はこれから本格的に立ち向かってゆかねばならない総合科学部の今後、大きな指針を与えられたと思っ

（かなた・すずむ）

第十二回アジア競技大会を成功させよう

No.8

華やかな開・閉会式

数々のドラマを予感させる開会式、ならびに感動と興奮の余韻を残した閉会式の演出には、監督・三枝成彰氏、総合ディレクター・菅野こうめい氏、式典ディレクター・大串亘氏が起用される。

開会式では、プロローグ「アジア平和コンサート」の後、第一部のアトラクションとして、歓迎のパフォーマンス、瀬戸内の自然・文化・歴史を和洋新旧の混成楽曲に含ませて表現するマスコームなどが行われる。続いて第二部として選手団入場行進、開会宣言、聖火点火、アジアと広島の過去・現代・未来を楽曲に含ませて表現するダンス・マスコームが行われ、「アジアの共生」のメッセージが発信される。

閉会式では、第一部として和洋楽器による序曲演奏や「歓喜」を表現するパフォーマンス。第三部として閉会宣言、次期開催地のデモンストレーション、聖火消火など。第三部として「光」、「炎」、「風」、「波」や広島の郷土芸能をモチーフにしたダンスやマスコーム、光と音の演出が展開される。

珍しい競技も登場

特に注目度が高いのは、アジア独特のスポーツ「セバタクロ」と「カバディ」である。

セバタクロは、約五百年前にマレーシアで生れた競技。サッカーとバレーボールを合わせたようなスポーツで、ルールはほとん

どバレーボールと同じである。手以外の足やひざ、頭などを使って三回以内に相手コートへボールを返すものである。ただし、一人が続けてボールに触れてもよいとされている。カバディは、インド、バングラデシュなどに盛んなスポーツ。道具は使用せず、相手チームの選手を捕まえるゲームで、格闘技の原点ともいえる。攻撃側と守備側に分かれ、攻撃側から攻撃手が一人守備側に入り、守備選手の衣服または体にタッチして自軍側に戻れば得点になる。ただし、攻撃手は攻撃中、息の続く限り「カバディ、カバディ、……」と連呼しなければならぬ。

アジアの芸術・文化を知ろう
アジア競技大会の公式プログラムには、スポーツ競技のほか、芸術・文化の交流を図るため「芸術展示」も含まれている。八月一日から十月三十日まで、「アジア競技大会広島アートフェスティバル」として、広島市を中心とする県内各地で美術、音楽、舞踊、演劇などさまざまな分野のアジアや日本そして広島の文化・芸術が紹介される。

HAGOC-101

Asian Harmony

わかちあう感動、結びあう友情。

広島交響楽団による「アジア音楽の夕べ／開幕式典」を皮切りに、フェスティバルの期間中「アジア子供アートフェスティバル」、「アジア民族舞踊音楽祭」、「アジアの心と文化展」、「日本の伝統美術」、「アジア交流広場」、「アジアスポーツ民族博」、「アジア人形劇フェスティバルin広島」などの特別プログラムをはじめとする百数十の多彩なイベントが計画されている。